

学校・保護者・地域をつなぐ...

うてよひびけよ 鼓中通信

「みんなでつながり、みんなでつくる学校」を目指して



第5号

鈴鹿市立鼓ヶ浦中学校
☎059-386-5852

令和8年7月17日

◆「14歳が二度あるか」～夏休み そして2学期に向けて～

皆さんは、今現在、何歳でしょうか？

鼓ヶ浦中学校には、15歳の誕生日を迎えた人も、まだ12歳の人もあります。ただ今回皆さんに伝えたい「14歳は二度あるか」という言葉は、12歳でも13歳でも15歳でも、それどころか中学生だけでなく、大人も含めた今を生きる人全員に心にとめておいてほしい言葉です。

この言葉は今から400年以上前の実際にいた14歳の少年の言葉です。彼の名前は「徳川頼宣(とくがわよりのぶ)」といいます。頼宣は、どうしてもやり遂げたい仕事を、まだ若いからやめておきなさいと止められた時に、居並ぶ偉い大人たちに向かって「14歳は二度あるのか」と実際に言い放ったのです。この言葉には「二度とない今、この瞬間をどう生きるのか？」という問いかけと「時間は二度と戻らない、だから今この瞬間のチャンスに全力を賭ける」という強い意志が込められています。

静岡県浜松市の舞坂中学校という学校には、正門近くにこの「14歳が二度あるか」という言葉が刻まれた石碑(せきひ)がたっているそうです。舞坂中学校の生徒たちは毎日その石碑の前を通り過ぎ、毎日その言葉を目にしているそうです。

皆さん、今年の夏休みはどう過ごしますか？

「中学校生活最後の夏を迎える3年生だけでなく、1・2年生にとっても、令和8年の夏は一度しかない夏です。」先月の19日、中体連の夏の大会を前に、壮行会でも皆さんにそう語ったと思います。14歳の夏は一度しかない。1年生の夏も2年生の夏も、35歳の夏も、57歳の今日の1日も二度と戻ってこない大切な時間です。「二度とない今、この瞬間をどう生きるのか？」ぜひ、しっかりと考えて、後で振り返った時、自分にとってよかったと思える夏休みを過ごしてください。

◆平和を考える 1年生被爆朗読会 1月1日

長崎県「原爆体験を語り継ぐ 永遠(とわ)の会」より、被爆体験記の朗読ボランティアの甲斐さん、佐藤さんのお二人にお越しいただきました。視聴覚室に集まった1年生に、当時の長崎の町の様子、原爆の威力、被害の状況と放射線の後遺症についてお話しいただきました。そして、作文集「原子雲の下に生きて」の朗読していただきました。実際に体験した、当時子どもであった人の体験記ということが、まっすぐなメッセージとして生徒たちの心に刺さるものであったようです。授業後のアンケートからも一人ひとりの心を揺さぶられた思いが伝わってきました。

◆夏休みの前に・・・1年生救命救急講習開催 7月14～15日



鈴鹿市消防隊員と職員の方々にお越しいただき、今年も心肺蘇生にかかわる救急法を教えてくださいました。万が一の場合救急車が到着するまでに、命をつなぐ方法です。非常時には、中学生も戦力になります。

7月14日に1年生1組・2組、15日に3組の生徒が、視聴覚室で、救命講習用の人形をモデルに体験を行いました。心臓マッサージ5分間は、体験して初めてかなりきついということがわかります。また、AEDの使用も大きな電流が流れますから危険が伴います。周囲への注意喚起や救急車要請等も同時に必要であることもわかりました。何度も繰り返し練習しないと上手にできなかったり身につかなかったりすることではありますが、今回の講習で、生徒たちは「わかった。できるようになった。」という手ごたえがあったようです。